

特集

マイナス(災害)をプラス(地域力)に変える 〜迫りくる宮城県沖地震に打ち勝つために〜

近い将来、かなりの確率で襲ってくると言われる宮城県沖地震。大規模災害に打ち勝つため、また災害が起きてても復興できる強いまちとなるために、私たちは何をすべきでしょうか。

過去の被災地から学ぶ

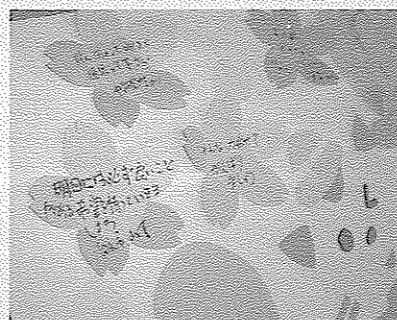
大規模災害が起きると、被災地には災害ボランティアセンターが立ち上げられ、全国各地から災害ボランティアが駆けつけ、被災地の支援にあたり活躍してくれました。しかしそこで最も大切なことは、地元住民の皆さんで災害を乗り越えようとする「地域力」です。

過去に全国で起きた災害では、本会職員も、被災地の災害ボランティアセンターのスタッフの一員として加わりました。「災害」はできれば誰もが遭いたくないものです。しかし、被災したからこそ人の温かさを感じ、地域の大切さに触られたという事例もたくさんありました。そのいくつかを紹介しましょう。

「輪島から贈られた門前の小学校入学式の手作り桜」

(能登半島地震より)
今年3月に被災地となった輪島市は、2月に旧輪島市と旧門前町が合併したばかり。この輪島地区の災害ボランティアセンターにスタッフとして来ていた地元ボランティア団体は、門前地区の被害の大きさを目の当たりにし、同じ市民として何か応援したいという気持ちに駆り立てられました。

そんな折、地元新聞社の記事に目が留まりました。「これならできる!」。早速子育て支援団体メンバーにも声を掛け、3日後に追った門前地区の小学校入学式のために、メッセージを書いた手作りの桜の花を贈りました。比較的被害が少なかった輪島地区住民の「自分たちでできる小さなこと



▲メッセージを書いた、満開の手作りの桜の花

いいから形にしたい」との思いが、震災で殺風景だった入学式に花を添えることができたのです。その後も、このメンバーが中心になって、被災した子どもたちへお楽しみイベントを開催するなど、「自分たちでできること」をキーワードに活動を展開させていきました。瓦礫の撤去や掃除だけではない、地元住民による、小さくても新たな活動へとつながる大きな一歩となりました。

▼「入学おめでとう!」輪島地区のボランティアさんから門前地区の小学校へ



「雑巾を取り替え、仕上げの水拭きまでつくった」

(能登半島地震より)
家の中の片付けと掃除に来てくれた大学生のお兄さん方。若い力でどんどん片付けと掃除をし、最後に雑巾がけをしてくださいました。一度水拭きをした後に、真っ黒になったバケツの水と雑巾を新しいものに取り替え、仕上げの雑巾がけをしてくださいました。帰りの笑顔を見て、若い人がこんなにも心配りをしてボランティア活動をしてくれるとは思いません。私たちが頑張らなくてはいけません。本当にありがとうございます。手紙より)

被災地の現場では、このような心と心の通いがたくさんあります。作業を通じた心の交流は被災者を勇気づけ、またボランティア活動のエネルギーを絶えることのないものにします。その「助け合いのエネルギー」は、外部からのボランティアなどが去った後の被災地住民同士、復興やまちづくりの力に変えられるのではないのでしょうか。

「地元高校生の涙、心の変化」

(福井豪雨被害より)
平成16年の福井豪雨被害は、床上・床下浸水合わせて約14,000世帯と甚大な被害を出しました。特に住宅街の被害が大きかった福井市水害ボランティアセンターに、「明日、三年生1,300人をボランティア活動に行かせたい」と地元私立高校の先生からの一本の電話。当時ボランティアの数が足りない状態でしたので、高校生の力に期待を寄せました。

しかし翌日、オリエンテーションを終えていざ活動となってもその場を動かさずとしない数名の女生徒。尋ねると、「なんで無理やりボランティアなんかさせるんだ!」と、学校の指示で活動に来ていることへの不満をぶつけてきました。彼女たちの意見も真っ当だったので無理には強要せず、「現場の様子の見学だけでも」と誘い、被害状態の激しかった堤防の決壊エリアまで歩きました。そこでは、地域の住民もボランティアも一緒になって、泥まみれで作業する姿が……。その中の一人の主婦が「大変だったのよ」と声を掛けてきました。すると、世間話のように語る主婦の話の聞いていたうちに、いつの間にか、あの生徒たちが一緒に泥のかき出しを始めたのです。

「地域力」のあるまちづくりへ向けて

「災害」という同じ苦しみを共有し乗り越え、またボランティアから得た力をその後たどる長い復興への道のりの足がかりにしていく。それが「地域力」の向上につながり、同時に災害時にボランティアを受け入れる意義でもあります。極限のダメージの中、現実に立ち向かおうとする被災住民のたくましい姿。それは、子どもたちにと

っても、人と人が地域で支え合って生きる大切さを感じられる機会となるでしょう。地域全体で子どもを育てる環境を整えることも、いま私たちに求められています。(みやぎボランティア総合センター作成)

●「県民向け災害ボランティアセンター運営スタッフ養成研修」のお知らせ●

- 災害ボランティアの役割・機能って? 災害ボランティアセンターの仕組みは? 過去の被災地の事例をもとに、実際に仮想災害ボランティアセンターを設置しながら、被災地中心の災害ボランティアセンター運営の具体的な方法を学び、地域コミュニティの重要性について考えます。
- <日時/会場/定員>**
- ①災害ボランティアセンター運営スタッフ基礎研修～災害ボランティアセンターを学ぶ～
6月30日(土) 10時～16時/ 栗原市若柳総合文化センター/ 100人
- ②災害ボランティアセンター運営スタッフスキルアップ研修～被災者の生活視点に立った災害ボランティアセンター運営とは～
9月11日(火) 10時～16時/ 宮城県民会館/ 60人
- ③災害ボランティアセンター運営スタッフスキルアップ研修～災害ボランティアセンターの運営から、被災者の生活復興の支援へ～
12月12日(水) 10時～16時/ 管工事会館/ 60人
- ④災害ボランティアセンター設置運営訓練
※県内7ヶ所の市町村での設置訓練を予定、現在調整中。
- <対象者>**
一般県民 (②③については、①を受講した方もしくは災害ボランティアセンターの基礎知識のある方)
- <参加費>** 無料
- <主催>** 宮城県社会福祉協議会
- <お問い合わせ・お申し込み先>**
みやぎボランティア総合センター
TEL 022 (222) 0010
FAX 022 (217) 9388

障害が重くても 地域の中で自分らしく！ ～重介護型トレーニングホーム「あなん」での挑戦～

入所施設という特別の場所ではなく、地域の中で生活したい。障害者支援施設「宮城県船形コロニー」では、高齢でも障害が重くても、全ての入所者に対して、ケアホームなどを利用して生活する地域生活の移行を推進するため、町の中で、日常生活と日中活動の両面でトレーニングを行っています。

その取り組みの一つである、重介護型トレーニングホーム「あなん」（以下、「あなん」という）を紹介します。

「あなん」の暮らし

宮城県船形コロニーから車で10分ほどの住宅街にある、縁側からの広い庭と七ツ森の眺望が心地よい木造二階建ての家が「あなん」です。グループホーム（※1）やケアホーム（※2）などで自分らしく生活するためには、どのような支援が必要で、どのようなトレーニングをすればよいのか。現在「あなん」では、個別支援計画のもとに、30〜70歳代の男性3人・女性2人が地域生活移行に向けて挑戦しています。

重介護型トレーニングホームとは、本会独自の事業で、施設に籍を置いたまま、制度化されたケアホームなどでの地域生活を想定してトレーニングを行う場（利用者負担は施設本体の生活と同じ）です。特に障害の重いつい知の障害者にとっては、この事前の訓練が効果的であり、また本会としても、障害が重く医療的ケアも必要な方のために24時間の職員宿直体制と看護師配置を国と県に提案した経緯もあり、「あなん」ではその支援体制を実践しています。また、ト

レーニングホームの様子を見てもらうことで、家族の理解と協力を図るというねらいもあります。

家の中は自分の足で歩きたい

「あなん」はごく普通の一軒家。ハード面のひと工夫と一人ひとり合わせた介護・支援の仕方次第で、高齢や障害の重い方でも一般住宅で暮らすことができます。宮城県船形コロニーはあくまでも民家改修型にこだわります。

「例えば施設では車いすのまま入浴できるけど、普通の家にそんなお風呂ってないでしょ？足の不自由なHさんも、手すりや滑り止め、すのこを付け、体の支え方を工夫し、普通のお風呂で入浴しています」と担当職員は語ります。

「そして何より足の筋力もついてきたんでしょ。コロニーでは車いすに座ってあまり動きたがらなかったのに、ここでは自分で歩きたいようですよ。外出先からホームに入る時だって、車いすを要求せず職員に支えられながら自分で歩くようになりました。車いす用の取り外し玄関スロープも、今じゃホコリをかぶるほど。そんな姿を



「それぞれなのになぜかまとまる！」「あなん」の皆さんと支援職員

▼民家を一部改修した「あなん」

※1. グループホーム（共同生活援助）…夜間や休日、少人数で共同生活を行う住居で、比較的障害の軽い方に対して、食事の提供や金銭管理等、相談や日常生活上の援助を行う。管理者、サービス管理責任者、世話人を配置。
※2. ケアホーム（共同生活介護）…夜間や休日、少人数で共同生活を行う住居で、障害の重い方に対して、入浴、排せつ、食事の介護等、身体介護も行う。管理者、サービス管理責任者、世話人、生活支援員を配置。

を渡してくれました。『そうそう、仲間同士助け合おうよ』というふうにも「あなん」の変化かな。誰かの鼻水を見つけるとティッシュを側に置いたりとかね』と笑う担当職員の口調から「あなん」での生活の手ごたえが感じられました。

お世話上手のTさんはお母さんの存在

Tさんのある日の様子

6:30	起床	まずは目覚めに朝茶を一杯。
7:00	朝食	仲間と食器洗いや洗濯物干し、身支度とやることいっぱい。コーヒータイムもね。
10:00	「工房すまいる」で日中活動	野の花摘みに近所を散策。外の空気は気持ちいい！昼食後は摘んだ花でシオリを作り、家族にプレゼントするため郵便局へ。
15:30	帰宅	洗濯物たたみや米とぎなど大忙し。おかしに合わせた食器選びは私のセンスに任せてっ！
18:00	夕食	お風呂の時間まで趣味の編み物、マフラは誰にプレゼント？
20:00	入浴	女性だけのお茶会に話が弾みます（男性は一足お先に夢の中...）。テレビは好きな歌番組で。
21:00	就床	

入浴で体がホカホカしたまま布団に入るのが幸せだと微笑むTさん。「米とぎが楽しい。あとみんなのお世話をするのが大好き」と、はにかみながら教えてくれました。洗濯や食事の支度などを積極的に手伝い、食事時には体の不自由な方が食べやすいように茶わんのごはんをはして

寄せてくれるなど、皆さんのお世話をこなす「あなん」のお母さんの存在です。小グループの中で役割を持つことで、生活に張りが出ているようだと言います。

ただし、体調が悪くても「大丈夫」と無理をしたり、年齢による体力や健康維持機能の低下もあるため、常に健康面の配慮は欠かせません。「あなん」では看護師を配置しているため、医療面で留意が必要な方でも、専門的な目（看護師）が入ることで状態の変化も早期に気づき、適切な対応が望めます。支援職員も気軽に相談でき、介護方法のアドバイスも得られるなど、看護師は本人・家族・支援職員にとって心強い存在です。

そのほか、障害の状況や関わり方は一人ひとり違いますが、必要な時に必要なサポートがあれば介護度の高い方でも地域で暮らせます。将来ケアホームに移った際に、世話人など支援に関わる方々へ、コミュニケーションの取り方、パニックを起こした時の関わり方、好きなこと・苦手なことのサポートの仕方などを伝える、「サポートシート」をトレーニングの様子をもとに作成していきます。

さらに、休日は地域のイベントに参加したり、近所の商店へ買い物に出掛けるなどさまざまですが、平日は主に「工房すまいる」へ通い日中の活動を行っています。日常生活の場と、日中活動の場をしっかりと分けて考え、両面を充実させることも大切です。

ちなみにこの日の夜、「あなん」の皆さんは居酒屋でお食事をしたそうです。伝え聞いた話によると、おしゃべりしたTさんは「おビールどうぞ！」と気分はすっかりスナックのママさんの様だったとか。これも「あなん」の良さですね。

障害のある方が地域生活を継続させるためには

「ケアホーム・グループホームの報酬単価の見直しが必要です。また、医療的ケアの必要な方にとっては看護師等の支えが求められます。国レベルでケアホームの看護師配置について検討してほしいですね」と、地域移行推進部長は制度上の課題を指摘します。

同時に、地域の中で生活するためには地域の皆さんとの関わりが欠かせません。皆さんも一度「あなん」を見に来てみませんか。

（宮城県社会福祉協議会取材）

「お問い合わせ先」
障害者支援施設「宮城県船形コロニー」地域移行推進部
〒981-13625
黒川郡大和町吉田字上童子沢21
TEL 0222(345)3282
FAX 0222(345)3984

●宮城県船形コロニーの地域生活移行に向けた取り組み
平成14年11月の「船形コロニー解体宣言」後、平成15年度からの4年間で、利用者195人がケアホームや家庭復帰など地域生活へ移行した。この間施行された障害者自立支援法や、みやぎ保健医療福祉プランの基本理念に基づき、今後も重度知的障害者の地域生活の実現に向けて取り組んでいく。基本方針は、①施設内の生活より安心で豊かであること②地域生活といっても家族の元に帰すことではないこと③個別支援計画のもと、全ての利用者を対象にすること④他民間施設や市町村等と連携・協力すること。現在の約250人の利用者のうち、障害程度は区分A（重度者）の方が90%を超えている。

●「工房すまいる」
宮城県船形コロニーが町の中に借りた、利用者の日中活動の場。職員やボランティアと工作、園芸、料理、音楽活動をしたり、町主催のサークル活動へ参加するなど、地域住民と交流も図りながら地域に慣れるための活動をしている。